

第二部 朝日連峰 平岩山より以東岳

マグネット 宮間原 忍

国鉄米坂線小国駅に出た。私とOは、とりあえず空腹を静めるため、駅前のラーメン屋のノレンを潜った。

もう空は、すっかり晴れ上り、気持ちの良い蒼空が広がっていた。しかし、ズボンや下着はまだ濡れていて、少々不快だった。そして小国発十三時三十五分のバスで今日の目的地の徳網に向うが、Oの職場の友人の家へ寄る為に、バス停、針生で途中下車する。針生は三方を山に囲まれた盆地のような所であった。Oの友人、Kさんの家はすぐ解ったが、本人不在のため次のバスが来るまで今度の朝日連峰縦走の食料の補充をしたり、衣類や装備の虫干しをバス停近くのたんぼを貸りて行く。

次のバスまでは、まだ二時間近くは充分にあった。たんぼに寝ころがり、白い雲を仰ぎながら、暖い陽差しを体いっばい包みこむと自然にまぶたが重くなってきた。「ああ田舎は良いなあ……」とうとうと午睡の途中どこからともなく一人の土地の古老が近づいてきて、赤や青や黄の極彩色の装備を見て少し驚いた様子で話しかけて来た。話し好きのようなその老人は「これから何処へ行くのか?」とか「あれが(と指差しながら)祝瓶山だな」とか「針生平では、岩魚が沢山釣れるぞ」とか、「毎年この辺りでは冬になると雪の重みで必ず三、四軒の家がつぶされる」など、キセルをボンボンやりながら話してくれたようだ。ようだというの

意味は、解るのだが、良く解らない時は、ただ笑って聞いているだけだったので。

結局、Kさんには会えず、次のバスで針生を後にして、終点の五味沢に着いた。終点から二時間位歩いて、今日の目的地、徳網に着き、部落の上の方にある吊橋の近くの河原で、幕営する。途中、土地の叔母さん達が、カタクリという華やかな紫色した、ちよつと岩桔梗に似た美しい花を取っていた。「どうするの」と尋ねると「来年の正月に食べる」と答えた。今夜は、久し振りで乾いたシュラフに入れたので、とても気持が良い。空には眠むれそうもない満天の星が浮かんでいた。

五月一日、四時起床。針生平に急ぐ。標高はまだ五百メートル弱なのだが、路にはもう残雪がいっばいで所々クラストしているので注意を要する。針生平は、夏には、牧場で牛でも放しているのだろうか、広々とした所で、農作業らしい小屋が、三つ程たっている。それから針生平依りカクナラ小屋の向うが、その途中又熊打ちに会う。そして道を教えてもらう。カクナラ小屋までは静岡辺りではちよつと見られない一本吊の吊橋を二回渡り、道に迷ったり、悪戦苦闘。今回東北の山に来て感じた事だけれども、やはり人があまり入っていないのか、非常に路が解りにくい。祝瓶山への取付も結局解らなかつた。

カクナラ小屋は、陽当りの良い台地に造られた、清潔な感じの建物で、誰れでも一度は泊ってみたくなる様な山小屋だった。やはり、ここまで来ると雪が多い為だろうか、屋根は鋭角で尖っている。そして小屋より、まだ残雪の多い荒川ぞいの道を二時間ばかり歩いて漸く平岩山への尾根の取付に達した。

取付より、ものすごい急な登りが始まった。天候も良く、樹林帯は暑く、私はシャツ一枚で登る。登りは、だからより、急な登りの方が、高度を稼いで私は好きだ。途中の雪渓で美味しい水で咽喉を潤す。森林限をやつと抜けると、千五百メートルの展望台におどりである。ここからは、平岩山まで、両側がスッパリ切れ落ちた見事な積雪が続き、朝日連峰が丁度、オワンを二つに切った様な格好で、迫力を持って鎮座している。荒川の源頭といえは永年の雪崩の作用で谷はズタズタに切れ、稜は細く長く迷路の様にジグザグに尾根に向っている。

感無量とは、こうゆう感じだろう。小休しながら、レーズンやビスケットで腹を少し満たして、朝日岳本峰に向う。さっきから気が付いたのだが、我々の前に、単独行者が歩いており、今、丁度尾根の向う側に消えた。私は、ふと昔の自分を思い出した。無性に会話が欲しくなり、きつと自分の後ろには誰れか歩いて来ていると信じ振り返ったが、そこにはやつぱり誰れもいなかった事。単独行とは、本当にやりがいもあるし、同時にやりきれなさもある孤独なスポーツなのだ。

結局、本峰直下で単独行を追い越して、十六時、朝日岳本峰に立つ。本峰を越えると、五分で朝日小屋に着いた。朝日小屋も、綺麗な小屋で、中には真黒に陽焼けした男が三人入っていた。清潔な小屋も在り、人もあまり多くはなさそうなので、今日は朝日小屋に泊る事にする。東北の山で感心する事は、まったく山小屋が整備されているし、清潔な事だ。道の件もそうだが、やはり利用する人もあまり多くないのだろう。

夕暮に、小屋の外に出て一服つける。昨日までいた、飯豊山、

これから行く、以東岳、右手に蔵王、月山が、夕陽に残雪を鈍く反射させている。私は、セーターを着ていたが少し寒く、短くなつたタバコを消した。さき程までの熱い山はもう無く、静かに佇む山がそこに在る。山に登り初めてもう今年で十年だなと思つた。山へ何故登るのかなと自問自答してみた。やはりそれは……

五月二日、四時起床、五時出発。今日も素晴らしい天気の下を、重いリュックザックを背い歩き出す。西朝日岳の下りでOの足の豆が破れて痛み出したので、ビニールテープで応急処置をする。快適にとぼして、北寒江山を過ぎ三方境まで来た。この辺りは、夏になれば、ヒナウスユキノソウ、ヒメイワカガミ、ウサギギク、ガンコウラン、チングルマ、アオノツガザクラ、ミヤマツムシソウ、ヨシバソオガマ、等々高山植物の宝庫であるが、今はまだ雪の下に夏を待っている。そして朝日連峰北端の雄峰以東岳が眼前に佇立している。三方境に荷物をデポして、以東岳に向う。右手に、孤穴小屋が見える。(二日後、大井沢に下山して、バスを待つていると、偶然、ボンボンに乗り、通り合わせた人が、夏になると、この孤穴小屋の番人をしている。志田さんという方で、Oのザックに、静岡県沼津市云々書いてあるのを見て声を掛けてくれたそうで、時々、静岡に、仕事でみえられるとの事でした。どなたか今度、夏に行ったら、孤穴小屋に寄ってみて下さい。お茶位サービスしてくれるかも。いやタダで泊めてくれるかな。)

以東岳にはすぐ達した。眼下には、大鳥池が、丁度鳥の羽根を広げた様な格好であり、まだ凍結している。ここまで来れば、日本海が見えると思つて来たが、少し霞がかかっていて、どこが海か、空か、はつきり解らないのだ。残念、寒いから帰ろう。

三方境で写真を取って、二つ石尾根を下る。今日は、天狗小屋まで行こう。そして、明日下山ということになる。これで朝日連峰ともお別れだ。

標高が、僅か千メートル位のニップ尾根だが、北面という事で残雪がすごく、三メートル位は楽にある。日中の暑い陽差して溶けた雪は歩きにくく疲れる。腹も減った。荷物も実際それほど重くはないのだが重く感じられる。やっぱり疲れが蓄積しているのかな。大体下山の方が登りより疲れると私は昔から思っている。

精神的なものもかなりあるが、或る目的を達すると、何んとか疲労は出るものだ。天狗小屋は、私たちが登った丘の眼下の雪溪の末端に佇んでいた。いつでもそうなのだが、見知らぬ山小屋に行く時は、そのイメージを頭の中で描きながら、目的地に向うクセがついてしまった。山小屋のイメージとはどんなものか。こじんまりとして温い。良く見ないと解らぬ位のエントツの煙。黒く光った床。くすんだ室内。トタン吹き屋根。壊れかけたストーブ。少し動きの悪い窓。そんなイメージにピッタリの天狗小屋だった。

朝日連峰で遭難死した学生の父が、心を込めて寄贈した小屋であり、中田文庫という蔵書が六十冊程内にある。こんな山奥に、こんなステキな小屋が有るなんて素晴らしい！

小屋のドアを開けると既に学生風の二人連れの男が、夕餉の仕度をしていた。シートをひいて横になり、疲れた体を伸ばす。小屋の窓から陽が斜めに差し込む。

これでまたひとつ旅が終ったと思った。今度の山行は、アルパイトをして費用を稼いだり、毎日走って体力を付けたり、今まで

とは少し心構えが違っていたかな。あたりはもうすっかり暗くなってきた。私はもう次の山へ想いをはせていた。



